

本日最後の一般質問となりました。今しばらくのご清聴をお願いします。

議長のお許しをいただきましたので、通告に従い、青少年の健全育成と教育行政について、お伺いします。

質問に入ります前に、昨日、県政自民クラブを代表しての猫田先生の、来年に迫りました古田知事の2期目に向けた質問に際し、知事より力強い出馬の決意が示されました。また本日伊藤先生より県民クラブを代表しての、支援の表明が、また公明党を代表しての岩花先生より支援の表明がされました。私も同じ思いから、無所属という立場で微力ではありますが、全力でご支援をさせていただきます。ただ次の4年間は、知事自らも発言されておられますが、ますます財政状況が厳しくなり、無い袖は振れないという、リーダーにとってやりきれない4年間かもしれませんが、知事にとりましては思い出深い国体、ぎふ清流国体が4年後に、また海のない県としては初めての豊かな海づくり大会は、2年後にと、明るい話題もスケジュールに入っています。

厳しい財政状態ではありますが、「試練はチャンス」ともよく言われます。知事の卓越した幅広いグローバルな交友関係、ネットワークに期待をしていますし、何より知事の秘めたる熱い情熱と思慮深い知恵に期待をしています。スローガンである「たしかな明日の見えるふるさと岐阜をめざして」ご健闘をお祈り申し上げます。なお当然のことですが、くれぐれも健康には十分ご留意ください。それでは質問に入らせていただきます。

教育は、「国家百年の計」とよく言われます。実際「国家百年の計」がどういう意味なのか、広辞苑で調べてみますと、「将来長い間のことを考えた計画」と説明してありました。それにしても、福祉や環境、まちづくりには、この言葉は使われません。どのテーマであっても、将来長い間のことを考えて計画しなければならないことに変わりはありません。しかし、教育にだけ使われることを考えると、それが国家の将来の行く末、発展するのか、衰退するのか、

いずれの道に進むのかについて大きな関わりを持つ、最大のテーマであることを物語っていると感じております。

百年といえますと、先日訪れたばかりのブラジル移住 100 周年を思い出しますが、日本人の持つ正直さ、勤勉さ、忍耐強さ、親切さなどの特性、連綿と受け継がれた DNA により、成功をおさめられ、すばらしい日系社会を築かれています。こうした繁栄のかけには、100 年前を考える時、江戸時代から続いた藩校の存在、江戸時代を通じて明治 4 年、西暦 1871 年までに 267 の大名家で藩校が設立されていたことや、また民衆の間でも、寺子屋などで論語を音読する儒学を中心とした教育制度が充実していたからだと思います。そのおかげで、正直で忍耐強くたくましい日本人の特性が育てられ、コーヒー農園での苦しい時代を乗り越え、成功に導かれたものと思います。まさに教育は「国家百年の計」といえるいい例だと思います。また日本においても昭和 20 年、戦禍により廃墟とかした日本を今日の目覚ましい発展に導いてこられた先人の勤勉さ、忍耐強さも、戦前の厳しい教育に裏打ちされたものであると感じます。教育の大切さを痛感させられます。戦後は、自由と民主主義の名のもと、日本人の本質とも言うべき礼節や情の心が薄らぎ、その上、情報社会の発達がバーチャルな世界と現実の世界との境界を曖昧にし、さらに儲かるためなら何をしてもいいという拝金主義もはびこっています。

連日テレビ、新聞では、いじめによる子ども達の自殺、引きこもり、家族や友人間で起こる殺人、営利のみを目的とした食品偽装問題、「誰でもいいから殺したかった」という動機不在の殺人などが報じられます。なお、テレビドラマにもなっていますし、多くの議員からもご指摘を受けています。モンスターペアレントの存在も大変気になります。

このように不幸な事件が多発している現状や教育の荒廃を憂い、日本の将来に不安を抱くのは、私だけではないと思います。

今後、青少年を健全に育成する環境をどのように整えていくかについては、政治に課せられた大きな課題であり、今や極めて緊急性

の高い最重要課題となっています。

政府もこうした社会の現状や、教育現場の荒廃を憂い、平成18年10月には、当時の安部政権によって、教育は「国家百年の計」として教育再生のための特別秘書官が置かれました。秘書官には、参議院議員の山谷えり子さんをあて、「社会総がかりで教育再生を」をメインテーマにして、教育再生会議をスタートさせました。そして昨年12月25日には教育再生として7つの柱を示し、第3次報告書が出されました。そこで私は質問のメインタイトルをこの7つの柱のうちの「青少年を健全に育成する仕組みと環境」と「子供たちにふるさとへの誇りと愛着を育む教育」との2点分けてお伺いしたいと思います。

まずはじめに、青少年を健全に育成する仕組みと環境についてですが、そのきっかけとなったのは、地元の小学校で開催された保護者対象の性教育に関する講演会で、講師が話された内容について、「子どもたちが学校で学習する内容としては、いきすぎた性教育にならないか」と相談を受け、その内容について私も疑問を抱いたことによります。その時思い出したのが、かつて拝聴した山谷えり子参議院議員のいきすぎた性教育に関する講演であります。

山谷えり子さんといえば、平成17年3月4日の参議院予算委員会における当時の小泉純一郎総理とのやりとりを覚えておられる方も多いのではないのでしょうか。学校現場における性教育が社会的に大きな衝撃としてクローズアップされた質問でした。ここに持ってまいりました本、題名は「性教育の暴走」には、その時の山谷委員の予算委員会での質問が掲載されていますので、その一部を紹介させていただきます。大阪、吹田市にある小学校1、2年生用の教育委員会が発行している性教育の副教材を取り上げて質問をしておられます。小泉総理の答弁は、「これは私も今初めて見たんですけど、この図解入りのこれはちょっとひどいですね。これ何年生に教えているんですか。」山谷委員「3年です」、小泉総理「小学生？」山谷委員「はい」、小泉総理「これは私も問題だと思えますね。ここまで教

える必要があるのか」と。

またこの本の、この部分には信じられないのですが「うちにあるコンドームを授業で使うから、ちょうだいね」そんなことを小学校6年生の女子に言わせる性教育。真犯人は学校なのか、教師なのか、教育行政なのかと書いてあります。この本には、その他にも信じがたい低学年へのいきすぎた性教育の実例について、枚挙にいとまがないほど、また詳しく載っています。その現実を目の当たりにして、驚かされました。

その後、自民党では、こうした教育現場の現状を受けて、日本全国の小・中・高校における過激な性教育の実態について調査するため、平成17年過激な性教育やジェンダーフリー教育の実態調査プロジェクトチームを立ち上げました。全国規模のアンケート調査を経て、同年10月には、日本全国から寄せられた3500通に上る信じられない保護者の声がまとめられています。その結果が、この本にいくつか掲載されていますが、その内容のあまりの恥ずかしさに紹介は避けさせていただきます。

全国の実態を知れば知るほど驚きの連続です。この本にも述べられていますが「こうした過激な性教育にさらされた子供たちは、被害者である。ただ性についてハウツー情報だけを吹き込まれた子供たち、そんなことだけを知らされた瞬間、彼らの異性を見る目、家族を見る目、人生観、すべてが一変してしまうに違いないと。」、私も全く同感です。

そこで教育長にお伺いします。

岐阜県の性教育の現状についてお聞かせ下さい。

この本の最後に筆者は全国の親御さんに、これだけは言いたいと。子供を「悪魔のささやき」から守る最強の砦は、親の愛情と温かな家庭以外にない、と締めくくっています。

そうした意味からすると、以前お話し、先日も大垣でご講演いただいた香川県の小学校の竹下校長先生が始められた、「弁当の日がやってきた」という子供が自ら弁当を作る運動は、すでに8年目を

迎え、全国 154 校まで広がり、大きな反響を呼んでいます。先日の大垣での講演でも、多くの保護者の感動の涙と笑いで一杯で、あっという間の 1 時間半でした。先生はこの運動の目的は家族の一家団欒だとおっしゃっています。そして同様に家族との会話があり、一家団欒の家庭の子は、性行動にブレーキがかかるばかりか、学力も向上するとも言ってみえます。ここにその本を持ってまいりましたが、何度読んでも心温まるすがすがしさを感じます。

教育長にもこの本をお渡ししました。学校の宿題としての「弁当の日」が、家族の和、家庭のぬくもりを生み、また地域の皆さんからも関心の高まる運動に育っています。私は「弁当の日」は、親の学びと子の学びが重なり、地域の方々を巻き込んだ、心を通わせるすばらしい宿題であり、運動だと思います。

また、ここに持ってまいりました竹下先生の 2 冊目の著書「台所に立つ子どもたち」の冒頭には、「戦後の貧しさの中で、親たちは子どもにひもじい思いをさせまいと、必死に働き、物質的に豊かな社会を築きましたが、皮肉なことに、子どもたちが今度は「心の空腹感」を訴えています。「心の空腹感」とは、生きている存在感の危うさです。子どもは、大人が考えている以上に、一人前になろうとしています。親に大切にされる存在であることを確認しようとしています。これは、子どもたちの人生をかけた悲願なのです。それが満たされなくて、不安になっている子どもがあまりにも多いと、そして、いじめや引きこもり、万引き、リストカット、援助交際、薬物乱用、こんな悲しい現象は、子どもたちの心の空腹感が引き起こす悲鳴だ」とかかれています。

「弁当の日」に真剣に取り組んだ子どもたちは、今まで食事を作ってくれた親に感謝するようになり、自分も誰かのために食事を作ることのできる人になろうと変わってきました。竹下先生は、「弁当の日」で日本を変えると訴え続けて土日を中心に全国を回ってみえます。

教育再生会議の第二分科会でもこうした親の学び、つまり親学、

家庭教育について、いろいろな意見が出ています。一部紹介しますと「今の家庭科の教科書では、家庭や家族の大切さを感じられるか疑問である。家庭の果たす役割の重要性を見直したい」とも訴えています。

家庭のぬくもりは子供たちにかかせないものであり、「弁当の日」を岐阜県でも設けることで、子供たちに親、家庭を考えさせる良いきっかけづくりになるのではないかと思い、少し長くなりましたが、「弁当の日」の取り組みについて、紹介させていただきました。

次に、現在の性教育の行きすぎを保護者の方と議論していましたら、「学校裏サイト」とか「ケータイ小説」を何とかしてください。と言われました。これは午前中の横山先生と重なるところもありますが、私なりにお伺いします。私にとっては、初めて耳にする言葉ですが、議会図書館に行きましたら、ちょうど新刊として、ここに持ってまいりましたが「学校裏サイト」という本がありました。サブタイトルは、ケータイ無法地帯から子どもを救う方法と書いてあります。

この本を読んでもみますと、ケータイはもはや「電話ではない」、インターネットもカメラも付いたパソコンであると書かれています。そして筆者は、インターネットというメディアの利用には、大人によくて、子どもには悪いというケースが多くあると。携帯電話は、子どもの健全育成の助けにならず、むしろ妨げになっていると言っしかないと言ってみえます。

さて学校裏サイトというのは、あの有名な巨大掲示板「2チャンネル」の中高生版ともいうべきもので、子どもが勝手に実在の学校の名前をつけて開設したサイトで、子ども達のインターネット上のたまり場となっているようです。当初は、中高生たちの連絡、情報交換用のツールと見られていましたが、最近では子ども達の過激な発信によるトラブルを生むケースが増えてきました。

文部科学省の調査によると、学校裏サイトは、すでに全国で

38,000 件ほどあるそうです。

この本の中を読んでもみますと信じられないような書き込みがあり、これが中高生のやりとりかと思えるほどです。

筆者つまり群馬大学社会情報学部の下田教授の研究室がこの「学校裏サイト」と呼ばれる中高生のインターネット遊びを真剣に調べようと決意したのは、2006年の夏、2つの中学校の校長から「うちの学校の生徒がおぞましい書き込みや写真の発信をして困っています。一刻も早くやめさせたいのですが、どうすればいいでしょう。何とかありませんか」という相談というより懇願があったからだそうです。その年の12月には、群馬県ですでに326の学校裏サイトがありました。群馬大学では、市民、行政が連携してインターネット時代の子ども有害情報、送受信問題に取り組み、いくつかの学校裏サイトの有害情報発行をやめされることができたと書かれています。

先日読んだ教育関係の新聞にも、全国連合小学校長会が、総務省に「学校裏サイト」などへの規制強化を求める意見書を提出しました。すでに小学生にまで及んでいるようです。

先に述べました教育再生会議でも、第3次報告で有害情報から子どもを守るため、全ての子どもの携帯電話にフィルタリングを設定するよう提言しています。先日もテレビでフィルタリングソフトを開発している会社を再生会議のメンバーが視察する様子が報道されていました。一日も早い実施を望みます。

次に、「ケータイ小説」も読んでみましたが、親さんが心配されるように、これまで青少年に読ませたくないと思われてきたわいせつ、暴力表現が過剰に盛り込まれています。こうした書籍が自由に本屋さんで買えたり、中にはベストセラーとなり、映画化もされているとか。こうした大人が知らないところで子ども達は、生命の誕生という性から、興味本位の性への誘惑に巻き込まれていっているのが現状だと思います。そこで本県の情報モラル教育の取組状況について、教育長にお伺いします。また、文部科学省では、昨年すべ

ての先生のための「情報モラル」の指導実践キックオフガイドを示して、現場での取り組みを支援していますが、岐阜県でのそのカリキュラム化への対応はどうなっているのでしょうか。あわせてお伺いします。

さてこれまで行き過ぎた性教育や情報化社会の中で知らず知らずに青少年に近づく「悪魔のささやき」について、どう対応すべきかを中心に訴えてまいりました。

次に、未来へ向かって子供たちにふるさとへの誇りと愛着を育む教育についてお伺いします。私は、これまでも教育問題についていくつかの提案をしてきました。朝の読書活動、環境教育、「弁当の日」を含めた食育運動、学校内や休耕田を活用した、農業の体験学習としての食農教育、盲導犬を活用した福祉教育、国際理解教育等です。今回、私は偉人、先賢人教育の推進をもう一つ的手段として提案をさせていただきます。

特に本県では、議場にお配りしましたように、平成3年11月に「郷土に輝く先人」として21人の顕彰を行い、先人の業績を後世に伝え、広く県民に公開するため、県立図書館にその「先人顕彰室」を設置しました。この21人には、大野先生のおじい様の大野伴睦先生も戦後を代表する党人派政治家として顕彰されています。ちなみに我が大垣からは3名が顕彰されています。特に松井直吉氏は、知事の母校である東大総長もつとめられました。しかし、現在この顕彰室は、企画展示室と変わっており、先日行ってきましたら、12月25日まで小説家、小島信夫展となっております。岐阜県出身で東京大学文学部英文科卒で、経歴をみますと、昭和36年から昭和60年まで、私の母校明治大学工学部で英文学を教えてみえて、名前も気になりましたが、お写真を見て、私も授業を受けたことがあることを思い出しました。不思議なご縁に、改めてびっくりしました。郷土の著名人の紹介のための、企画展示室としての活用はこれはこれでいいとは思いますが、21人の方の資料等は歴史資料館に保管されていると聞いておりますが、これら先人の方々の今後の活用について

環境生活部長にお伺いします。

なお、こうした施設をもっと青少年の健全育成に生かせないかと思うのは、私ばかりではないと思います。

大垣市においても、今年市制90周年を迎え、大垣ルネッサンス先賢展と銘打ち、先人の顕彰のイベントを春夏秋冬と4回に分けて開催します。議場にいくつか配布させていただきましたが、春に観る「花と音楽のまち」大垣では、春の展示はすでに終わりましたが、近代植物学の開拓者といわれる飯沼慾斎、また日本音楽を西洋に紹介した琴の名手、戸田極子女史、女史は岩倉具視氏の令嬢で、最後の大垣藩主戸田氏共氏の夫人となった方です。上石津出身の偉大な作曲家、江口夜詩さんは、「あこがれのハワイ航路」や「赤いランプの終列車」のヒット曲で有名です。夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣では、6月28日から大垣スイトピアセンターにおいて開催中です。我が国最初の工学博士で日本鉄道界のリーダーとして松本莊一郎氏、鉄道界の元老で南満州鉄道社長で工学博士の野村龍太郎氏、養老鉄道の創始者、立川勇次郎氏などの足跡が紹介されています。我が大垣市が鉄道のまち、博士のまちといわれたゆえんです。引き続き、秋には、「歴史と文化のまち」大垣、冬には「産業と防災のまち」大垣と続いていきます。ぜひ皆さん大垣へお越し下さい。他の地域にも八百津町の命のビザを発行した杉原千畝、言志四録を執筆した儒学者で岩村藩出身の佐藤一斎と多くの先人をこの本県は排出しています。本県の先人の業績を伝え、郷土ぎふへの誇りと愛着を育むふるさと教育に役立てるべきだと思いますが、どのように取り組まれているのか、教育長にお伺いします。

なお、県ではこれまでに郷土の偉人のマンガ本として、マンガでみる日本真ん中おもしろ人物史シリーズを出版しています。これまで私も郷土の先人を楽しんで読ませていただき、大変勉強になりましたし感動しました。ここに8冊目の最新版の木曾三川治水群像とデ・レーケを持ってきました。このマンガ本は、水害との闘いに永年苦しんでいる我が西濃地方の物語だけに感慨もひとしおです。当

時地元の県会議員の方々の並々ならぬ努力も書かれてあります。中に脇坂先生のご親戚の方もおられました。

古田知事は、このマンガ本の最後に感想文をよせて、一人でも多くの県民と全国の皆様に、私たちのふるさと岐阜県の治水に関わった人たちの誇るべき業績について知っていただきたいと言ってみえます。

しかし、この人物史シリーズも第8刊をもって休止との話も、もれうかがっていますが、先程も述べましたように、郷土の先人をもっと広く多くの県民、全国の方に知ってもらう為にも継続をお願いするとともに、これらの本は現在学級文庫として、小中学校の各クラスに入っているとのことです。もっと積極的に活用され、青少年のふるさとへの誇りと愛着を持つ教育に役立てていただければと思います。小学生の子どもを持つ親さんからも、学級文庫にあるだけでは、子どもは読まないと思うと。本県は道徳が充実しているので、道徳の授業にぜひ活用してはどうですかと言われました。

そこで、環境生活部長にお伺いします。マンガで見る日本真ん中おもしろ人物史シリーズの活用方法についてお聞かせ下さい。

以上、青少年の健全育成と教育行政について2つの側面から5点お伺いしました。教育長はじめ関係部長の誠意ある答弁を期待し、質問を終わります。